

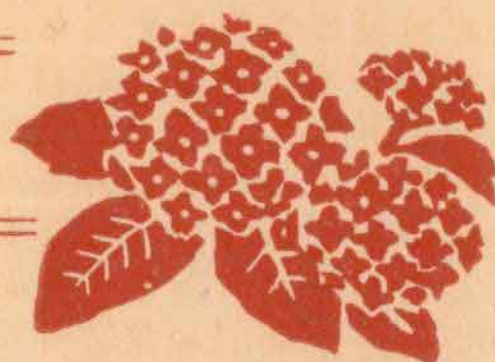


角川文庫

—1429—

武藏野

國木田獨步



角川書店



昭和三十一年六月二十日 初版發行
昭和三十九年六月十日 十九版發行

定價九拾圓

著作者 國木田獨步

發行者 角川源義

印刷者 中内あき子
東京都豐島區高田南町一ノ六四

角川文庫

武藏野

發行所

東京都千代田區富士見町二ノ七 株式會社 角川書店
振替東京一九五二〇八

電話九段(261)〇二二(代表)

落丁・亂丁本はお取替へ致します

武 藏 野

國 木 田 獨 步



角 川 文 庫

1429

目次

鹿狩	忘れえぬ人々	詩想	おとづれ	たき火	星	源叔父	置土産	わかれ	郊外	武蔵野
----	--------	----	------	-----	---	-----	-----	-----	----	-----

一八	一四〇	一三五	一三三	一〇三	九	九	七	六	七	五
----	-----	-----	-----	-----	---	---	---	---	---	---

河霧 小春 遺言 初孫 初戀 絲くづ

解説

野田宇太郎

二三

一六 一七 一八 一九 二〇 二一

武藏野

一

「武藏野の^{おちか}梯は今^{いま}纔^{わづか}に入間郡に残れり」と自分は^{ぶんせい}文政年間に出来た地圖で見た事がある。そして其地圖に入間郡「小手指^{こてさし}原久米川は古戰場なり太平記^{げんこう}元弘三年五月十一日源平小手指原にて戦ふ事一日か内に三十餘度日暮れは平家三里退^{しりぞき}て久米川に陣を取る明^{あき}れは源氏久米川の陣へ押寄せると載^のせたるは此邊^{みたり}なるべし」と書込んであるのを讀んだ事がある。自分は武藏野の跡^{あと}の纔^{わづか}に残て居る處とは定めて此古戰場あたりではあるまいかと思て、一度行^{いっ}て見る積^{つくり}で居て未だ行かないが實際は今も矢張^{やうり}其通りであらうかと危^{あや}ぶんで居る。兎も角^{かく}、晝や歌で計^{はか}り想像して居る武藏野を其^{その}梯^{はし}ばかりでも見たいものとは自分ばかりの願ではあるまい。それほどの武藏野が今は果していかゞであるか、自分は詳^{くわ}はしく此間に答へて自分を満足させたいとの望を起したことは實に一年前の事であつて、今は益々此望が大きくなつて來た。

さて此^{この}望^{ぞう}が果して自分の力で達せらるゝであらうか。自分は出来ないとは言はぬ。容易^{ようい}でないと思て居る、それ丈^{ただ}け自分は今の武藏野に興味^{しゆみ}を感じて居る。多分同感の人も少なからぬこと

と思ふ。

それで今、少しく端緒をこゝに開いて、秋から冬へかけての自分の見て感じた處を書いて自分の望の一小部分を果したい。先づ自分が彼間に下すべき答は武藏野の美今も昔に劣らずとの一語である。昔の武藏野は實地見てどんなに美であつたことやら、それは想像にも及ばんほどであつたに相違あるまいが、自分が今見る武藏野の美しさは斯る誇張的の斷案を下さしむるほどに自分を動かして居るのである。自分は武藏野を美と言つた、美といはんより寧ろ詩趣といひたい、其方が適切と思はれる。

二

そこで自分は材料不足の處から自分の日記を種にして見たい。自分は二十九年の秋の初から春の初まで、澁谷村の小さな茅屋に住で居た。自分が彼望を起したのも其時の事、又た秋から冬の事のみを今書くといふのも其わけである。

九月七日——「昨日も今日も南風強く吹き雲を送りつ雲を拂ひつ、雨降りみ降らずみ、日光雲間をもるゝとき林影一時に煌めく、——」

これが今の武藏野の秋の初である。林はまだ夏の緑の其ままであり乍ら空模様が夏と全く變つてきて雨雲の南風につれて武藏野の空低く頻りに雨を送る其時間には日の光水氣を帯びて彼方の林に落ち此方の杜にかゞやく。自分は屢々思つた、こんな日に武藏野を大觀することが出来たら如何に美しい事だらうかと。二日置いて九日の日記にも「風強く秋聲野にみつ、浮雲變幻たり」と

ある。恰度此頃はこんな天氣が續て大空と野との景色が間斷なく變化して日の光は夏らしく雲の色風の音は秋らしく極めて趣味深く自分は感じた。

先づこれを今の武藏野の秋の發端として、自分は冬の終はるころまでの日記を左に並べて、變化の大略と光景の要素とを示して置かんと思ふ。

九月十九日——「朝、空曇り風死す、冷霧寒露、虫聲しげし、天地の心なほ目さめぬが如し。」

同二十一日——「秋天拭ふが如し、木葉火の如くかゞやく。」

十月十九日——「月明かに林影黒し。」

同二十五日——「朝は霧深く、午後は晴る、夜に入りて雲の絶間の月さゆ。朝まだき霧の晴れぬ間に家を出で野を歩み林を訪ふ。」

同二十六日——「午後林を訪ふ。林の奥に座して四顧し、傾聴し、睇視し、默想す。」

十一月四日——「天高く氣澄む、夕暮に獨り風吹く野に立てば、天外の富士近く、國境をめぐる連山地平線上に黒し。星光一點、暮色漸く到り、林影漸く遠し。」

同十八日——「月を踏で散歩す、青煙地を這ひ月光林に碎く。」

同十九日——「天晴れ、風清く、露冷やかなり。滿目黄葉の中綠樹を雜ゆ。小鳥梢に囀ず。一路人影なし。獨り歩み默思口吟し、足にまかせて近郊をめぐる。」

同二十一日——「夜更けぬ、戸外は林をわたる風聲ものすごし。滴聲頻なれども雨は已に止むたりとおぼし。」

同二十三日——「昨夜の風雨にて木葉殆ど搖落せり。稻田も殆ど刈り取らる。冬枯の淋しき様

となりぬ。」

同。二十四日——「木葉未だ全く落ちず。遠山を望めば、心も消え入らんばかり懷し。」

同。二十六日——夜十時記す「屋外は風雨の聲ものすごし。滴聲相應ず。今日は終日霧たちこめ

て野や林や永久の夢に入りたらんごとく。午後犬を伴ふて散歩す。林に入り黙坐す。犬眠る。水流林より出で、林に入る、落葉を浮べて流る。をり／＼時雨しめやかに林を過ぎて落葉の上をわたりゆく音靜かなり。」

同。二十七日——「昨夜の風雨は今朝なごりなく晴れ、日うら／＼かに昇りぬ。屋後の丘に立て望めば富士山眞白ろに連山の上に聳ゆ。風清く氣澄めり。

げに初冬の朝なるかな。

田面に水あふれ、林影倒に映れり。」

十二月二日——「今朝霜、雪の如く朝日にきらめきて美事なり。暫くして薄雲かゝり日光寒

し。」

同。二十二日——「雪初て降る。」

三十年一月十三日——「夜更けぬ。風死し林黙す。雪頻りに降る。燈をかゝげて戶外をうかど

ふ、降雪火影にきらめきて舞ふ。あゝ武藏野沈黙す。而も耳を澄せば遠き彼方の林をわたる

風の音す、果して風聲か。」

同。十四日——「今朝大雪、葡萄棚墮ちぬ。」

夜更けぬ。梢をわたる風の音遠く聞ゆ、あゝこれ武藏野の林より林をわたる冬の夜寒の凧な

るかな。雪どけの滴聲軒をめぐる。」

同二十日——「美しき朝。空は片雲なく、地は霜柱白銀の如くきらめく。小鳥梢に囀ず。梢頭

針の如し。」

二月八日——「梅咲きぬ。月漸く美なり。」

三月十三日——「夜十二時、月傾き風急に、雲わき、林鳴る。」

同二十一日——「夜十一時。屋外の風聲をきく、忽ち遠く忽ち近し。春や襲ひし、冬や遁れし。」

三

昔の武藏野は菅原のはてなき光景を以て絶類の美を鳴らして居たやうに言ひ傳へてあるが、今の武藏野は林である。林は實に今の武藏野の特色といつても宜い。則ち木は重に櫓の類で冬は悉く落葉し、春は滴る計りの新緑萌え出づる其變化が秩父嶺以東十數里の野一齊に行はれて、春夏秋冬を通じ霞に雨に月に風に霧に時雨に雪に、緑蔭に紅葉に、様々の光景を呈する其妙は一寸西國地方又た東北の者には解し兼ねるのである。元來日本人はこれまで櫓の類の落葉林の美を餘り知らなかつた様である。林といへば重に松林のみが日本の文學美術の上に認められて居て、歌にも櫓林の奥で時雨を聞くといふ様なことは見當らない。自分も西國に人となつて少年の時學生として初て東京に上つてから十年になるが、かゝる落葉林の美を解するに至たのは近來の事で、それも左の文章が大に自分を教えたのである。

「秋九月中旬といふころ、一日自分がさる樺^{カハ}の林の中に座してゐたことが有つた。今朝から小雨が降りそゞぎ、その晴れ間にはをり／＼生^なま暖かな日かげも射^さしてまことに氣まぐれな空^{そら}合^あひ。あわ／＼しい白^{しろ}ら雲^うが空^{そら}ら一面に棚^{たなび}引くかと思ふと、フトまたあちこち瞬^{また}く間雲^{まぐれ}切れがして、無理に押し分けたやうな雲間から澄みて伶俐^{さか}し氣^けに見える人の眼の如くに朗かに晴れた蒼^{あざ}空^{ぞら}がのぞかれた。自分は座して、四^し顧^こして、そして耳を傾けてゐた。木の葉が頭上^{かみ}で幽^{かす}かに戦^{そよ}いだが、その音を聞^きいたばかりでも季節は知られた。それは春先する、面白さうな、笑ふやうなさゞめきでもなく、夏のゆるやかなそよぎでもなく、永たらしい話^わし聲^{こゑ}でもなく、また末の秋のおど／＼した、うそさぶさうなお饒^{しやべ}舌^しりでもなかつたが、只漸^{やうや}く聞取れるか聞取れぬ程のしめやかな私語^{さご}の聲^{こゑ}で有つた。そよ吹く風は忍ぶやうに木末^{こきぎ}を傳^{つた}つた、照ると曇るとで雨にじめつく林の中のやうすが間斷^{かんたん}なく移り變^かつた、或はそこに在りとある物總^{すべ}て一時に微笑したやうに、隈^{くま}なくあかみわたつて、さのみ繁くもない樺^{カハ}のほそ／＼とした幹は思ひがけずも白絹めく、やさしい光澤を帯び、地上に散り布^しいた、細^{こま}かな落ち葉は俄^{にわか}に日に映じてまばゆきまでに金色を放ち、頭をかきむしつたやうな「パアポロトニク」(蕨^{わらび}の類^{るい})のみごとな莖^し、加^か之^かも熟^うれ過ぎた葡萄^{ぶどう}めく色^{いろ}を帯びたのが、際限^{さいげん}もなくもつれつからみつして目前^{まへ}に透^すかして見られた。或はまた四邊^{あたり}一面俄^{にわか}かに薄暗くなりだして、瞬^{また}く間に物のあいろも見えなくなり、樺^{カハ}の木立^{こだ}ちも、降り積^たつた儘^{まま}でまた日の眼に逢^あはぬ雪のやうに、白くおぼろに霞む——と小雨^{こさめ}が忍びやかに、怪^{あや}し氣^きに、私語^{さご}するやうにバラ／＼と降^ふつて通^とつた。樺^{カハ}の木の葉は著^いしく光澤^{さつさく}が褪^さめても流石^{さすが}に尙^なほ青かつた、が只^{ただ}そちこちに立つ稚木^{わかぎ}のみは總^{すべ}て赤くも黄ろくも色づいて、をりを

り日の光りが今ま雨に濡れた計りの細枝の繁みを漏れて滑りながらに脱けて来るのをあびては、キラ／＼ときらめいた。」

則ちこれはツルゲーチフの書たるものを二葉亭が譯して『あひびき』と題した短編の冒頭にある一節であつて、自分がかゝる落葉林の趣きを解するに至つたのは此微妙な叙景の筆の力が多い。これは露西亞の景で而も林は樺の木で、武藏野の林は櫟の木、植物帯からいふと甚だ異て居るが落葉林の趣は同じ事である。自分は屢々思ふた、若し武藏野の林が櫟の類でなく、松か何かであつたら極めて平凡な變化に乏しい色彩一様なものとなつて左まで珍重するに足らないだらうと。

櫟の類だから黄葉する。黄葉するから落葉する。時雨が私語く。風が叫ぶ。一陣の風小高い丘を襲へば、幾千萬の木の葉高く大空に舞ふて、小鳥の群かの如く遠く飛び去る。木の葉落ち盡せば、數十里の方域に亘る林が一時に裸體になつて、蒼ずんだ冬の空が高く此上に垂れ、武藏野一面が一種の沈靜に入る。空氣が一段澄みわたる。遠い物音が鮮かに聞へる。自分は十月二十六日の記に、林の奥に座して四顧し、傾聴し、睇視し、默想すと書た。『あひびき』にも、自分は座して、四顧して、そして耳を傾けたとある。此耳を傾けて聞くといふことがどんなに秋の末から冬へかけての、今の武藏野の心に適つてゐるだらう。秋ならば林のうちより起る音、冬ならば林の彼方遠く響く音。

鳥の羽音、囀る聲。風のそよぐ、鳴る、うそぶく、叫ぶ聲。叢の蔭、林の奥にすだく虫の音。空車荷車の林を廻り、坂を下り、野路を横ぎる響。蹄で落葉を蹴散らす音、これは騎兵演習の斥候か、さなくば夫婦連れで遠乗に出かけた外國人である。何事をか聲高に話しながらゆく村の者

のだみ聲、それも何時しか、遠かりゆく。獨り淋しさうに道をいそぐ女の足音。遠く響く砲聲。隣のエでだしぬけに起る銃音。自分が一度犬をつれ、近處の林を訪ひ、切株に腰をかけて書を讀んで居ると、突然林の奥で物の落ちたやうな音がした。足もとに臥て居た犬が耳を立てゝきつと其方を見詰めた。それぎりで有つた。多分栗が落ちたのであらう、武藏野には栗樹も随分多いから。若し夫れ時雨の音に至てはこれほど幽寂のものはない。山家の時雨は我國でも和歌の題にまでなつて居るが、廣い、廣い、野末から野末へと林を越へ、杜を越へ、田を横ぎり、又た林を越へて、しのびやかに通り過ぐ時雨の音の如何にも幽かで、又た鷹揚な趣きがあつて、優しく懷しいのは、實に武藏野の時雨の特色であらう。自分が嘗て北海道の深林で時雨に逢た事がある、これは又た人跡絶無の大森林であるから其趣は更に深いが、其代り、武藏野の時雨の更に人なつかしく、私語くが如き趣はない。

秋の中ごろから冬の初、試みに中野あたり、或は澁谷、世田ヶ谷、又は小金井の奥の林を訪ふて、暫く座て散歩の疲を休めて見よ。此等の物音、忽ち起り、忽ち止み、次第に近づき、次第に遠ざかり、頭上の木の葉風なきに落ちて微かな音をし、其も止んだ時、自然の靜蕭を感じ、永遠の呼吸身に迫るを覺ゆるであらう。武藏野の冬の夜更て星斗闌干たる時、星をも吹き落しさうな野分がすさまじく林をわたる音を、自分は屢々日記に書た。風の音は人の思を遠くに誘ふ。自分は此物凄風風の音の忽ち近く忽ち遠きを聞ては、遠い昔からの武藏野の生活を思ひつゞけた事もある。熊谷直好の和歌に、

よもすから木葉かたよる音きけは

しのひに風のかよふなりけり

といふがあれど、自分は山家の生活を知て居ながら、此歌の心をげにもと感じたのは、實に武藏野の冬の村居の時であつた。

林に座つて居て日の光の尤も美しさを感ずるのは、春の末より夏の初であるが、それは今こゝには書くべきでない。其次は黄葉の季節である。半ば黄ろく半ば緑な林の中に歩いて居ると、澄みわたつた大空が梢々の隙間からのぞかれて日の光は風に動く葉末／＼に碎け、其美さ言ひつくされず。日光とか碓氷とか、天下の名所は兎も角、武藏野の様な廣い平原の林が隈なく染まつて、日の西に傾くと共に一面の火花を放つといふも特異の美觀ではあるまいか。若し高きに登て一目に此大觀を占めることが出来るなら此上もないこと、よし其れが出来難いにせよ、平原の景の單調なる丈けに、人をして其一部を見て全部の廣い、殆ど限らない光景を想像さする者である。其想像に動かされつゝ夕照に向て黄葉の中を歩ける丈け歩くことがどんなに面白からう。林が盡きると野に出る。

四

十月二十五日の記に、野を歩み林を訪ふと書き、又十一月四日の記には、夕暮に獨り風吹く野に立てばと書てある。そこで自分は今一度ツルゲーネフを引く。

「自分はたちどまつた、花束を拾ひ上げた、そして林を去つてのらへ出た。日は青々とした空に低く漂つて、射す影も蒼ざめて冷かになり、照るとはなく只ジミな水色のぼかしを見るや

うに四方に充ちわたつた。日没にはまだ半時間も有らうに、モウゆうやけがほの赤く天末を染めだした。黄ろくからびた刈株をわたつて烈しく吹付ける野分に催されて、そりかへつた細かな落ち葉があはたどしく起き上り、林に沿ふた往來を横ぎつて、自分の側を駆け通つた、のらに向つて壁のやうにたつ林の一面は總てざわ／＼ざわつき、細末の玉の屑を散らしたやうに煌きはしないがちらついてゐた。また枯れ艸、莠、藁の嫌ひなくそこら一面にからみついた蜘蛛の巣は風に吹き靡かされて波たつてゐた。

自分はたちどまつた……心細く成つて來た、眼に遮る物象はサツパリとはしてゐれど、おもしろ氣もおかし氣もなく、さびれはてたうちにも、どうやら間近になつた冬のすさまじさが見透かされるやうに思はれて。小さな鴉が重さうに羽ばたきをして、烈しく風を切りながら、頭上を高く飛び過ぎたが、フト首を回らして、横目で自分をにらめて、急に飛び上つて、聲をちぎるやうに啼きわたりながら、林の向ふへかくれてしまつた。鳩が幾羽ともなく群をなして勢込んで穀倉の方から飛んで來た、がフト柱を建てたやうに舞ひ昇つて、さてパツと一齊に野面に散つた——ア、秋だ！ 誰だか禿山の向ふを通ると見えて、から車の音が虚空に響きわたつた……

これは露西亞の野であるが、我武藏野の野の秋から冬へかけての光景も、凡そこんなものである。武藏野には決して禿山はない。しかし大洋のうねりの様に高低起伏して居る。それも外見には一面の平原の様で、寧ろ高臺の處々が低く窪んで小さな浅い谷をなして居るといつた方が適當であらう。此谷の底は大概水田である。畑は重に高臺にある、高臺は林と畑とで様々の區畫をな

して居る。畑は即ち野である。されば林とても數里にわたるものなく否、恐らく一里にわたるものもあるまい、畑とても一眸數里に續くものはなく一座の林の周圍は畑、一頃の畑の三方は林、といふ様な具合で、農家が其間に散在して更らにこれを分割して居る。即ち野やら林やら、たゞ亂雑に入組んで居て、忽ち林に入るかと思へば、忽ち野に出るといふ様な風である。それが又た實に武藏野に一種の特色を與へて居て、こゝに自然あり、こゝに生活あり、北海道の様な自然そのまゝの大原野大森林とは異て居て、其趣も特異である。

稻の熟する頃となると、谷々の水田が黄んで来る。稻が刈り取られて林の影が倒さに田面に映る頃となると、大根畑の盛で、大根がそろ／＼抜かれて、彼方此方の水溜又は小さな流の潯で洗はれる様になると、野は麥の新芽で青々となつて来る。或は麥畑の一端、野原のまゝで残り、尾花野菊が風に吹かれて居る。萱原の一端が次第に高まつて、其はてが天際をかぎつて居て、そこへ爪先あがりに登て見ると、林の絶へ間を國境に連る秩父の諸嶺が黒く横はつて居て、あたかも地平線上を走ては又た地平線下に没して居るやうにも見える。さてこれより又た畑の方へ下るべきか。或は畑の彼方の萱原に身を横へ、強く吹く北風を、積み重ねた枯草で避けながら、南の空をめぐる日の微温き光に顔をさらして畑の横の林が風にざわつき煌き輝くのを眺むべきか。或は又た直ちに彼林へとゆく路をすゝむべきか。自分はかくためらつた事が屢ある。自分は困つたか。否、決して困らない。自分は武藏野を縦横に通じてゐる路は、どれを撰で行つても自分を失望さゝないことを久しく經驗して知て居るから。